13
2057
2

へ13 特
2057
2

さて平家とかろほどに源氏いつとくの世まをあらそふ事
千若丸鞍馬山にて出家のすをきゝ己が方へ向ふとすをと
大將にしてさゝあげさんこと三まるの一年く京都に家より
今賣吉次といふもの奥州へ下り秀衡に用をたゝしく
富貴の商人有し者町人よハ珍しき義勇の有男なれば
是をさの〳〵平家をそむくふ向へむやと吉次がゝるをまち
右之おもむき語り給ひ吉次人あく反合来年下向
の時ゝよりも従さんとや合せて迎より吉次い都へ
のぼりるゞ近衛河ふよ兵庫の所新政といふ人有こを
も源氏の一るいまて吉二出入のるゝを迎より政の方きゝ
て秀乃平のさのゝのゝを迎一つぶさに相談をるさいの
頼政い去り平治の軍の時一家をたゝる迎清盛さたる

深夜ニ
至て
寺寶を
うばふ

ぶひ〜也〜平家よりも二人ゐき男士と思ひる平家さうん
る也べとてあつよくい籠上〜て平家を討ろぼ〜源
氏の世よ云るぶ〜さんと思ひる也〜けらい浦辺長七と云て
年若の方〜小金を他の太刀并ゑ衣被ホとてとり出をのせち
きを屋いの思ひさちあ下い頼政も加勢せんと祝ごろよゆ
つ〜也ぶ秀云らぶんぎ〜吉次ぶ吐〜をきて大きて
ゑ云こび早〜し若の方〜まり相談のうへ奥州へ同道
〜てゐつ也と云々也ぶ吉次もよろこびまより只云とりくら
中〜ゆ云てゑよ年若よたいめん〜云でひらよりまさぶ
ん中ゑ云奥州下向の時い人目ふうらぬよ云也〜也ぶ
ぶ下男とゐ〜秀云て〜ゑと出ともせんと万支さんめ〜
合せるまより亟安四年二月のまよいとり吉二ハうり

買の法色の三の物とゐら〜主徒五人旅の用意として
云てゑふ年若の方〜知〜せる也ばう〜ふんを改より
とゐり〜大力其外着類ホ中で云てゑ与ゑろ〜よゆ
年きぶ〜ゐらまと云のびいで吉二ゑ方へきゐりて也より
吉二ぶめ〜法ひの財よりて〜古犯ゐるぎるひて人目を
ゆ〜〜扶合六人ゆて三条を出立〜てもちのくと下りる
ほどゐくこの国青墓とひふまぐつきゐぬけまる墓〜て
長者大炊といふのあり姫ゑ延まとて〜鈴の出てゐあい
あつ〜ま〜ゆ〜源氏のをゐろ〜ゐるをゐげきゐゆ年若
くらゐるゐあつ〜ま〜と受て先年分折〜ゐひをゐ〜
きげんとゐゆびゐる也〜し節大炊ゐゆ〜と吉二ゑ吐〜
青墓へ立より長者夫婦よたいめん〜一礼をのべられが

摺針
兄弟
千並
おそ出く
手下と
形る

ふうなもうしまうしたは目つんへとるーなまぐさをおがーて
はびろる先二三日大炊うるまんは逗留あるるはとる
大炊の惣領は大太とのふのーえとり娘松世とて今年
十六才なるは巫付るりーーーげ年若のようぎまめでー
ある夜くーーのの森而ーーー志のびきるり思ひのさけを
ちよりさるくとくどるるーーー岩木するあーーぬ牛ちう
九むさめぐんー貫ふぐんはおぐーーめされさびはれーの
はとひ羽やつぐびくるる巫ぬ志き孫のうーん男ひ源き
意の測ふもちらぬ先としてあけのう孫をでうーみ
りさて吉二も大炊うんー弾はせちせるくところを
やさもはは山のものくーーりみどーーてんのせーはぬ
くーふーくーーりまぬはいはおまぐび家内くるく

よろこびるくーーのう九八夫婦うんー中松世がるさけぬ
ふくるる巫くー思ひで七八日くくーーりるるはる夜大炊
ふくるぬ牛ふはむひくちのくーのりあーーハ一ま年はは
はは雛をたいさるもるるまーー美鈴さるの御公達の
ゆさでーーちらせるふッせうでくの出立をおがみるは
くーくもるのッぬ四をたくすも同前行でで孫ぐび
たくまつるとやくる巫ぐうーーのはるを吉二へくるのー
ーる巫ぐ吉二風くー和るーーぬまー姉孫び家内のとは半り
るれぐくるーーるまーーくて荷物はあるーー太力きるいを
くるでーー仕くくはおよびるるさてくーー若むーーくるまて
のひくるーくくー児のくくちはあひあげいくくーくつたに
小金他の太力をたき上座くくるるくをどせくまひりり

悪賊藤沢入道

群黨を催ふす

かくくうしゝ若九のありさまを見るに志ぜんと大将軍の威をもつて大炊夫婦をとらへむ吉二家内のものまでおそれずうらをばよつけうり丈とりて大炊よりはこびのおまりふ廉酒をつくりあげてふうぬるみよびまむを見もつけいろくちんそをきーあげてふうぬるみよびまむを見もつ山さまくまいぐきてめたるまつりけ丈吉二をもてめるおい下部ふいるまでもはいの酒妾酔ふーゝぜんごをこぶし祝いつまるしほとりよりまの酒原とゆゝ所あり常盤木と名づけ大なるむときの松おりくまきこゝおるこの下をむきぐーしまつよ登りて旅人のゆきをうくく金銀荷物の多限よをーじよ下ふ差圓ーて是をもぎとらーむ

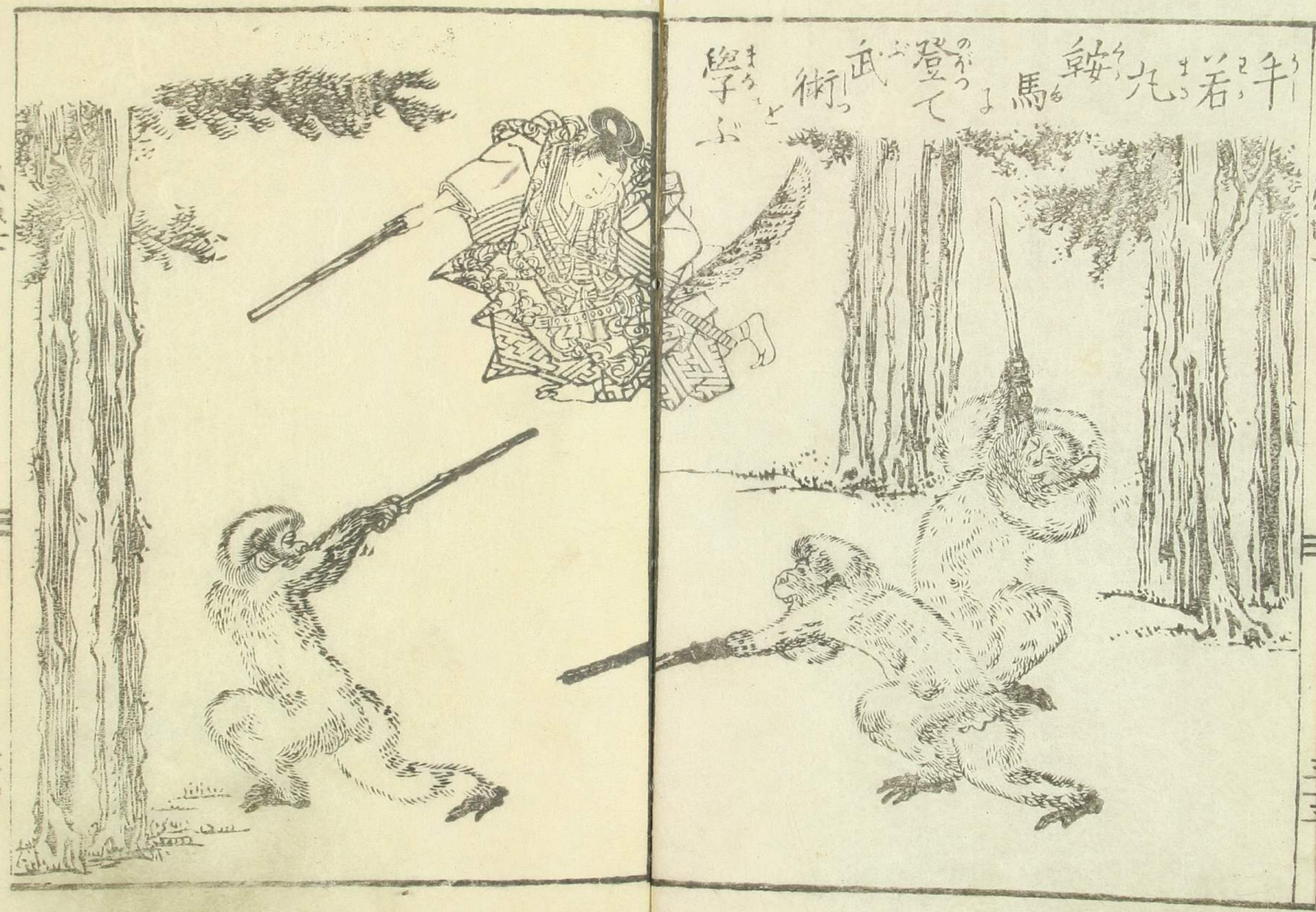
ゝつまくこうまかゝある海道るゆ丈其賊をくだくるゆ日ゆ

近國
らんぞう
亂入
す

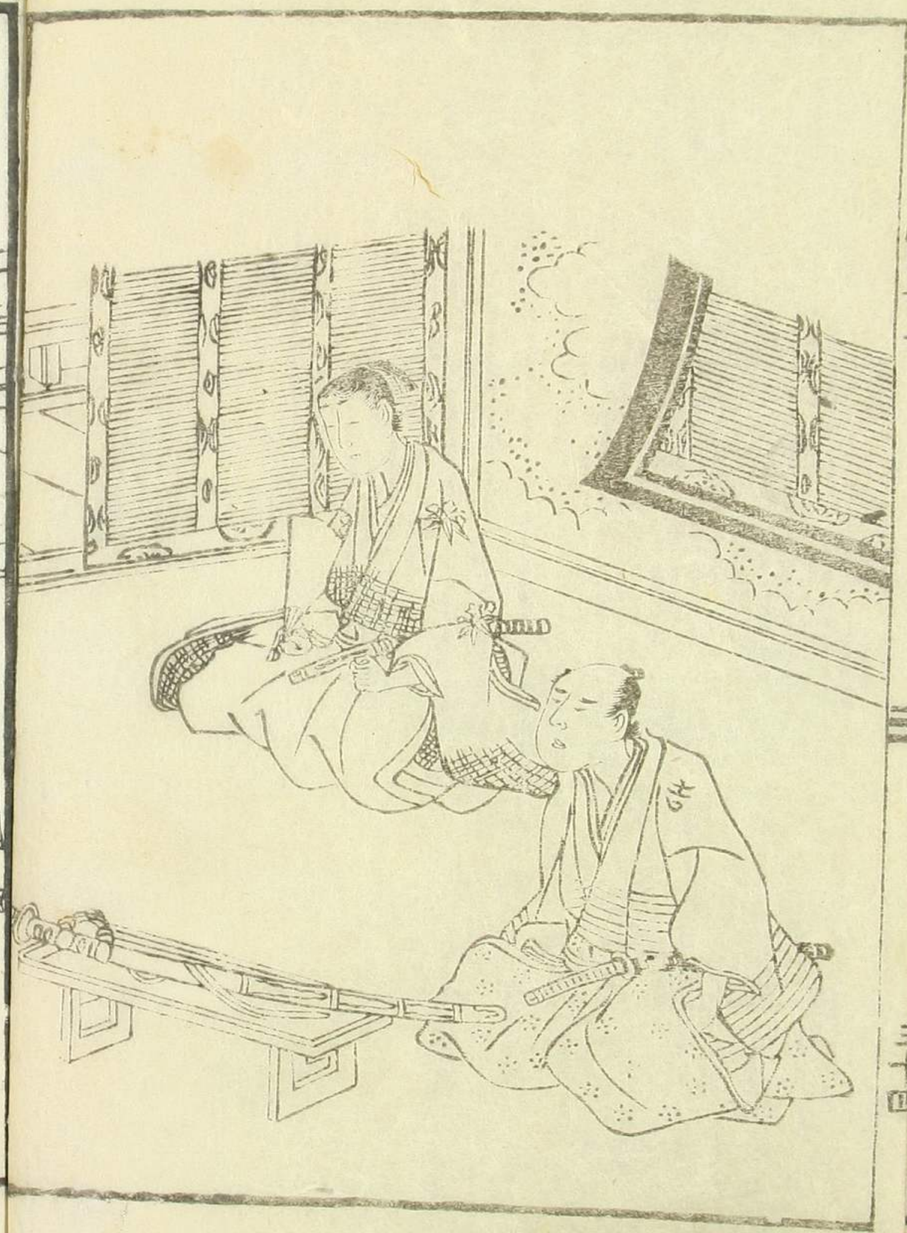
いく千々へとといつるぞをーらば熊坂てうそん物見のまつ
と垂ゐいつるよハさ出みアとくやさて此れ熊さゝ入道ハ
この玉よたいくるいー書のが系よゐ下をまつゆ加祢うり
吉二ゝ書墓の大炊うりこ泊アこるをきて大勢をよびよせ
てうぐんをるおろい承安四年三月廿三日熊坂ゑゐ
小猿を大炊ゝ方へ志のぞーぢーのようすを見せるに
用ゐけんごといへどもよいの志西ゑんゑ替ゝ酔ふーてぜんご
をうをを出ー由小猿志ぢうくまこうるかさ出べ横ゑをあ
さてを出ゝくつきよういちのぢせつゐりとて右之殿いちく
ゆきうせ恐びいるぞきてゐひと形ーゐり先首長熊坂
ぞ出立ハ黒糸おとーの鎧獅子ゑ杜丹をきんてて
つけゐるをて金物十王頭の瞋あてゐゐんだんをりの

儀小千さーちよ屈いづきんゑ頭とつみ三尺二寸の太か
をとき馬ゑの小ときゑ大長刀弓手ゐりつゐる松火ハ
さゐをををすぐきてのあアさゐ六尺ゆさの大男アゐりゐ
武氣法人ーきぐ出いゐるゐ天ア鬼神ゐりーーとを出ぬ
その系ゐゐーーと我ゐちぐつも彩毋ーと思ふたぐりのを乃
出立甚ハおとらぬ若者にハ藤沢入道由利の太郎三条
在つぐぬの小猿摺針太郎同二郎牛山權治麻生のつ
中川三國の九郎赤城の龍夜叉ふち圓源八ゆ川ゐゐ
十ふ魚津二郎高根の四郎蒲野ゑ市掘下小六ゐ
祢の雪右衛つ後の鳥助ちみの嶋八逆行のゑ一義をりの
十向疵多蔵こぐゐ出の傳吉黒坐染法師千退猪之助
外山の鹿左つ横雲入道ゐろしの角右衛つ森山左軍治

手若丸鞍馬に登て武術を學ぶ



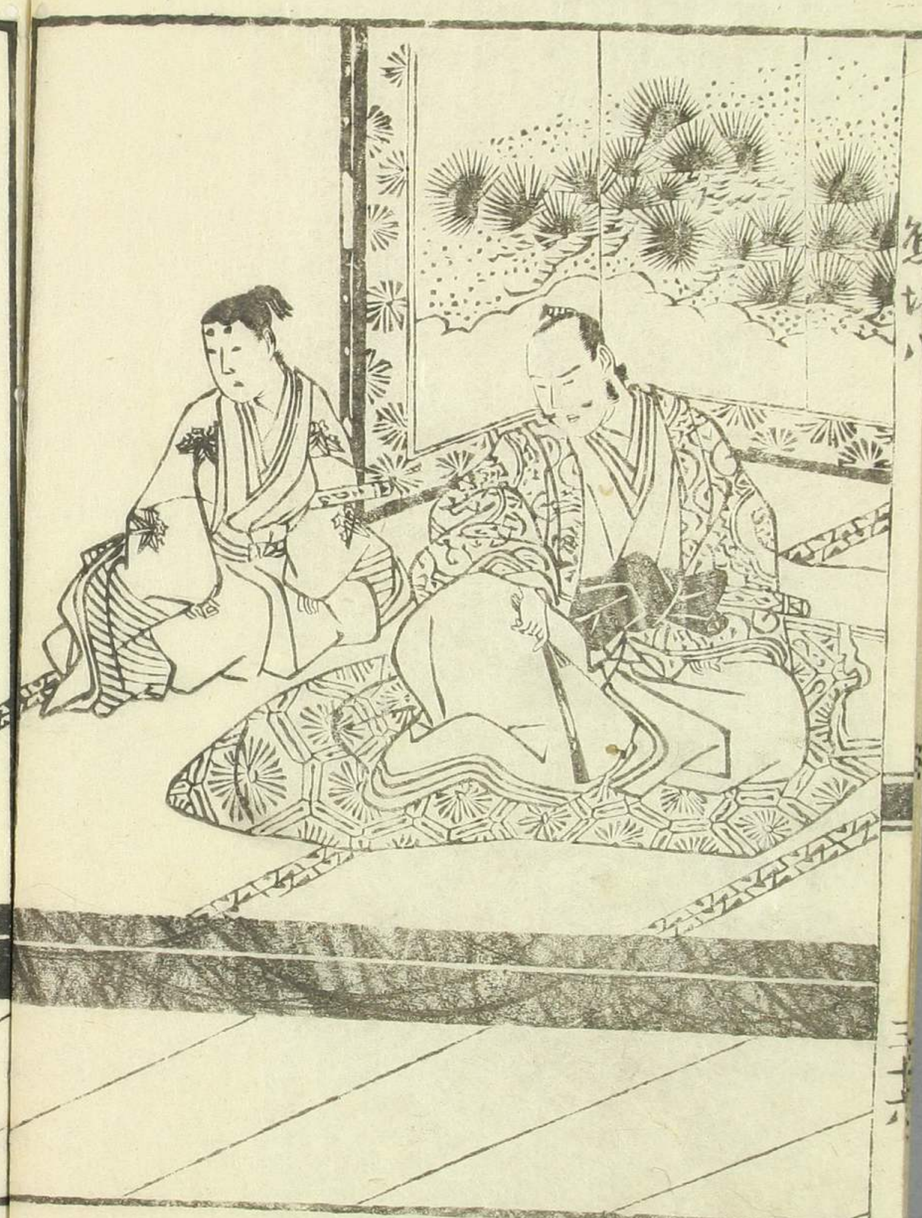
頼政
仗を
もつて
武具共
送る



ふをまちぢめとしてあるべきよの常延引定儀ふ
ぞくつぐふ七十四人いるひ夷形の出立まて皆〳〵てんぐの拵もの
くをしつさげ大炬ふりとり捍きふる甚夜八ツ〳〵もあげ
しきさろ家内をつをきづまりぐ草木もふそのさ
めーさく空もきらめく星づきよくまさうにふをつく
づふんまつ〳〵たつる不ふまろき衣を身ふまとひ
小女壹人いづくともなくてんとあふをしる坂が
まをまたつくと立つ忠髪左右ふりみんぐ〳〵につさを
とらふ甚ありさるるんと云乗ふいぐるんまをろ〳〵く
もまをさをさをさをーやりとふそきのてをそんるをしぐる
ともせぐ何者るをしび今吉ぐたいるふのさるをしぐ
るをやは時女答曰みづふまをせん福ん越中國

砥波山まて無体るる双ふかふ世を太〳〵ちやがふ山美之
ぐや汝我世まありー時階老の髪りぐるー二世まを
も加をとふと拵言ひをもちーめるまを親兄弟の目ば
志のびふく夫姫のるんの糸むをびをめふーをうふよ
おるふをーやどををー情のふぐを子牧〳〵ぐるふぬ妹背
の中うき名のり出て古ふまをぐをれぐをてあふり
立ち生紙もち出くとともにいづくのふ〳〵浪のよ〳〵定
めぐて立出ーまおもひもよふぬなんふぐ兆道こをりの
双よは身を害ーて出をあるふ戸骸をぐ吾川の
ちひろのをを魂落され魄ふぐ彩とりふともふきを
出ぐも魂ハ黄泉まおちとちれカ山叡樹のたへがを
ふをーををけいをよ輪廻ををるる出び冥土のふげも

年若
成長
義兵を
なげ



みんじがつぎりつ迄いろんいざきる迄とくくれ〳〵
髪はまさぐり眼はぐみ朱をそそぎいつさとにら
〳〵まりさるねこるねこひびきそとものさぐ〳〵もとより勇
もつのくゆきるたれがはさう〳〵もおそび大太刀ふりまは迄
四方をたふこい七魂のさぐるかげろふいるづまのちんいの
かのふたつときえさる煙の西てへ空よりるびく運氣のけ
ふり〳〵きや北より大なる流星飛ぐ南へ流るくる
坂をろはとくくくやく〳〵中天をまりつめるがよこ
でをうつく兵を主る参宿よ客星飛入る時いてのいい
るる〳〵ぎ破ると晋天文志ろつ〳〵台〳〵へ法皇秦よ
推して韓の仇とむくうんとして遂さる時よ山流星の
ちる〳〵いるさいぜんおそやが幽魂といふ又は天変をあ〳〵

ふまさいはつがうんめいの傾くく前表うとちがうくくく
祈んとしてたつるるうちけるが我これまでよ思ひ迷ぐる
大望やつうさうでざるべきやとと力足どうくとふ〳〵ゐじし
ものとも十分油断とうへうり門を破まて下知まれべ
ばいろ〳〵うりと右よそなへ〳〵出羽の國の住人まて由利
の太郎先へまく〳〵んで重さ十二才日よつくり立大谷
をつく表のつをお破迄いは皆〳〵一度よ乱入家門の
うちのいい祈みよきいく大きにおぐろひうへをあさと
さんらんまて吉三もよいのかどの酒りうまそよく祈り
〳〵けものをとふおどろきとびをきるぐ〳〵り祝えの
ひと腰をつとうつぎのまさうてうけいつるほどるく
玄関とり由利の太郎まいえまく〳〵んでふるねせ迄を

ちゃうじゃ
長者
ごんぞう
御曹司へ
ちん
珍味を
さぶる

ふ〻こさ〻しいざ迎ひとげ〻されぐてんでよさいまつを
ものつさげく奥をめがけく〻ぐ迎いる時〻に吉二つぎの名よ
仁王立ちをるへをあまへ大音あげ不敵なる夜盗のやつ
ばらるふぶをがいたとうく〻ん人金責吉二がをりうつく
ア〻ひるいく〻おや〻二つせまと太力をつこうよさ〻せば
ふ〻ぐ〻これをきつとふ〻ん〻ちんあゆくなんでたいぼうの
ふ〻を〻らんやむ〻ぐ〻ぐんの若とのむとりつをんでのけ
ろとお知さ迎がんぶ〻ぐりと三國の九郎大太力を高み
さ〻めざ〻一ぶ字よおく〻ぐるぶ〻り〻吉二もうち合せ
二ぶ二〻ちく〻めひ〻ぐさ〻が大金をとりつく〻ちんごくを
往来さる吉二よりど兵法のさ〻ぐ〻あると又〻ぐ〻
たんでうつ太力こ玉ぶ〻めく〻先せすたりうつぶる是を

ぶ〻ぐ〻三浦の与市つぐいて大太力をさ〻めざ〻ぐそうを
飛ぶり横ぶるぐさよ与市がもろあ〻をくのきさよりう
切ぐをとぶ〻ぶぐさ〻入道大きよいう大長力を振舞
〻吉二ぶ〻むぶうく折合せ〻ぐ〻ぶさぶ千〻牙を
たのみ〻逆勇のえのるの迎べ右ぐ〻て吉二ぶ太力を
うちをと〻大ををぶろげ〻むぐをと〻ぐ〻上をちをを
組ち合〻ぶ入道ちく〻やきうぶん吉二をとつ〻れ〻
を〻ぶをを迎ぶ左軍二〻ぐ〻ぶ〻ぶをりめさ
ぶりついよさ〻ぶ小をまいを〻め邪ぐきるのい生捕さり
奥へさ〻ん〻ぐ〻ぐ〻ぶ物ぐ〻ぐ〻ひ〻ぐ〻ぶ〻ぐ〻ぶばぐれぐん〻
ぶりと麻生ぶ〻ぐ圏をひく〻松火ぐつさげ〻ぐ〻杉戸を
けやぶりく〻ぐ〻をさ〻て〻ぐ迎いる時〻きさ〻し若

席を正して武威を雅ふ

悪賊の長梵
熊坂
張樊
依奇
天變を
さとる

九八吉二が祝るあとまて大炊まぬと四方山のうたゑ
よしゑうつりしかるゝ所なる大てうぞうまぬむさめまけが
あつてとうらロをり元てるまぐーてめふよひの出立
のすがおとそのさできへとんで出杉戸のあげまうさをのんで
きちうとうとうゑまる赤ゝぬ麻生の若松ゑとまの内へ
飛こむ出合がらよ牛つ若先血まつりと手太刀よこうん
とりむるいくとこきうさげら出ちけむりうくたゑ伏
つぎまあ市くる渡のがんさけをけるうふくるゑ車切ふうつり
ゑ〻くあにりはいく入くるふ柔右傳つこ生の小猿を
きまおどうゑ行やつるゑ出べ元てうなしぼ二人りまてむこひの
ありさ反切口ーいうまぎうとい〻ゑこの赤まハよるあ上と
下間をのぞけい年の比二八むりのうくーきゑ人也

うーにうまるぶあとよてとふはてぐさ血刀さげてたち
ゑ〻ふ赤つ小精ふ出とうんて二人りを切ーふきゑつうこうさう
のがまるゑやうちと西方ようり打てゑる牛若ゑうりと引ゑて
二人を相ゑよ二打三打うち合ーが右人いうつくまおを
三ゑるぐうりひうゑとあーゑ孤さうりまづまとうんへーがも
ひとん〻打込太刀右つ小ざる右うちよ双方うさうきうり
うゑ出ゑんゑとるゑふたを出ふまゑ由利太郎是とうんて
大斧をふりまわーふおんゑるゑ出とおくうるうーつゑ
ゑうりたりのうゑ二ゑ出りとびのきゑへば太郎ちうゑ
まうせゑまおろまゑ斧ゑ平をきりぬゑ祝ぐ二すだうり
きうまうーぬんうりゑ切ゑ胴ぎうゑ切ゑをすうぐ沢
八道是をうゑ〻長刀栖永ふおつうりのぐおてうる

數百の群盜積寶を

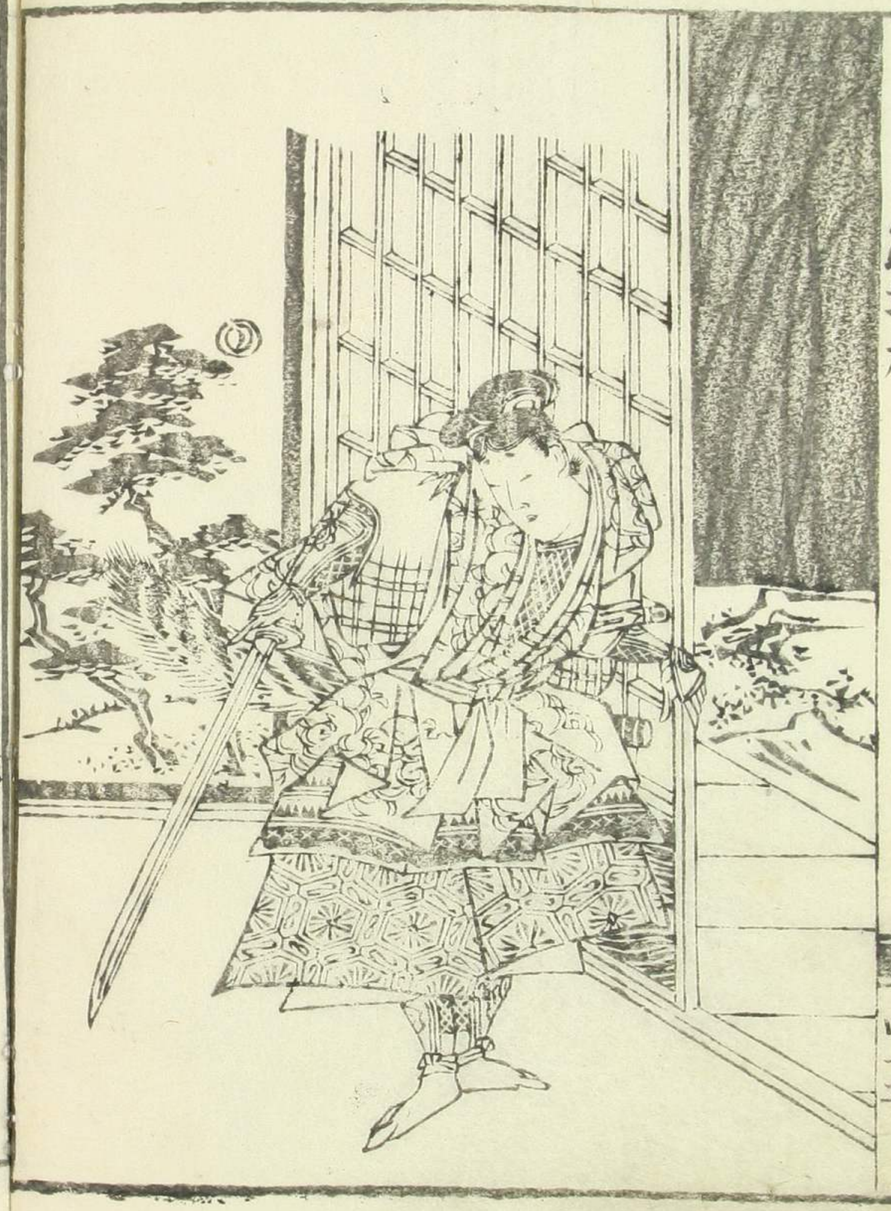
めがけく

門戸を破る

いろ〳〵と牛若とび出さつる角ぐまへ〳〵ぬけ入道長刀を
とり直し胸いさ〳〵ふ突所をもらりと右之方へ開き
ぬくび石沢の水力の先へ〳〵ら〳〵と泳く突込〳〵撓んとする
〳〵ろよりとろ〳〵と祢丁と切込はさ熊坂大きまいり
中〳〵由なの計り立ぐい叶ず皆〳〵撓て折てしれと
下知する由へ指付兄弟自兵津高根矢他柳下〳〵山
賊子くつき母くの奴ろ十四五人左右前後へ押ぬまく
〳〵右かもさかぐ大ぜいと相まとして小太刀ふり
振まわ〳〵縄十文字ふ月稲妻精さふり乱舞のまを
くぐ見や走ぐ〳〵我ひし〳〵指付兄弟初〳〵て盗賊
十三人をふり〳〵切伏せら出強勇不敵の盗人ども
命うものぐ祢叶ずと表の方へ逃出さ熊坂是を

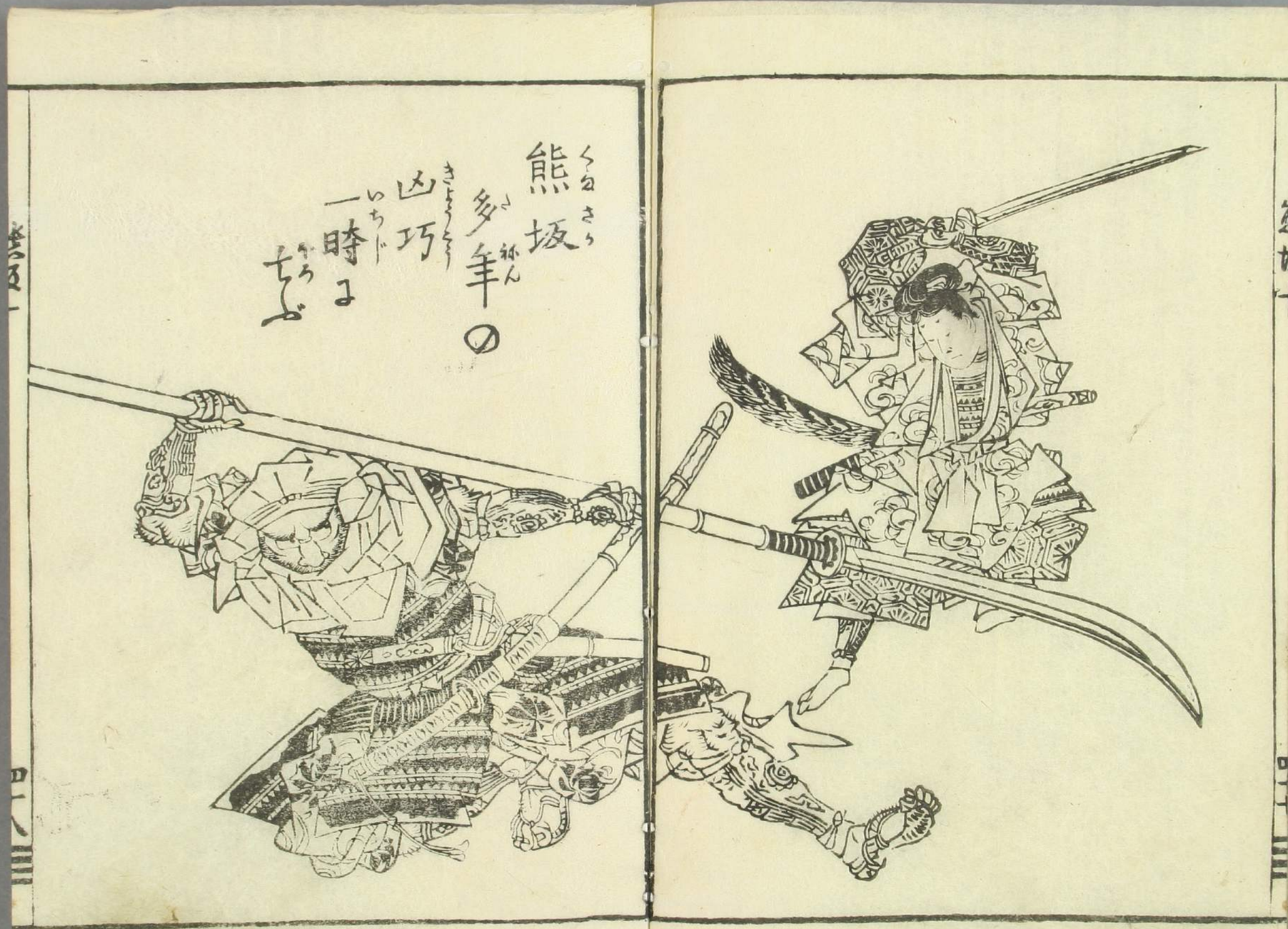
追〳〵やあのおぢ出た〳〵天狗神なるとも
入道ぐ出つをふるひぐ打ふつんぐ〳〵んよ〳〵
〳〵出て〳〵ものどものいでき〳〵よ〳〵ぜんとぐ
なる栖ぬ〳〵ふるとる〳〵つま戸のうげをとるてふ〳〵り
牛若丸を祢ぐいよるう〳〵ろ是をとんて汐ハ盗人の
て〳〵ほんとうふて〳〵り我ぬよかつく成佛せよまやぐま
おの〳〵左馬頭〳〵ともの九男牛若丸ぐまかつて
〳〵と間髪の前〳〵うつて〳〵よと太刀さ〳〵かぐ
牛ち〳〵手〳〵ぶ熊坂もち〳〵と大事と長刀ふまへ股〳〵まつ先
よつく双方位をとり扣て〳〵ぶ熊坂いふてつる足をふ
鐵壁も通出て突長刀ふまを〳〵と太刀
て〳〵ど合て右〳〵方へ付込西へくまさふ〳〵りと乱ひさり

吉治かをつくして
吉
亂賊を防ぐ



おつゝり出して丁ゝとうつ刀をひきづんぐなつしをみる
入道いつくふてまハせど長刀をたゝるゞ右ふうけ
うちまゝとろふをおどりこゝ出刀の宗よ飛つりめバ魅
奴おどろ尼力まるせ出くふを飛とりるゞ右のうゝつけ
こむ由へよ入道出をてちよゝど排ふをとびあひしゞ
甚場よゝくちのゝくさるゞ由へ入左ゝうぎに男ひ小降めハ
何方へ逃ゝやとゝんまハせびたりの上すやい入道ゝ
つゝハ是ふおりと聲うけらまたゞをるゝ出刀取
のへ突んゝまるふを稲妻のおとく飛乃りるゞ入道
たのゝ先ゝゝゝみのたつ出より三寸斗切さげられ
こハ無念やともかくふを又ゝとゝら右の腕首きを
こまゝおどゝぞ長刀をおゝゝまゝ物業まて叶はじ

千若
一刄を
をつて
數賊を
鏖
巻及一


熊坂
多年の
凶巧
一時に
ちり

其二

つゝと引いでくまんまでと大手をひろげとびかゝる
此時牛若おなじくをもつしてやとおるさくゞりて
ちうと切さすがのくせものなりけれどもさすがの手並
に眼もくらみ無念くと云ながら伏ておきしが牛若
飛かゝつて首を一度に落し血刀をおつ振ひ表の
方へかけ出る所へ跡のものどもくゞきたりけるを一々風に
木の葉のちるごとく雲を霞と逃行る牛若はそれ
よりにげちりたる男供をよびよせ悪黨どもの死
體をかたづけさせ吉二がいましめときほどきあた
へいたはりいたるを其より人をもしらせまゐけるに
大炊夫婦なよびに娘よびもどし家内をあつめて
見くる人数をかぞへみるに下女下男四五人ものこらず

そのまゝなるづ孫八は床の下なる風呂桶大釜の
どまかくれいきてありて居けるをとくなら〔く〕の
孫出し先家内の者にけがなきをよろこびて
珍味珍酒をさゝげ御曹司をまじへ吉次へも十分をあ
まためさせて牛若がぬるいなきをそれとかんじ皆々
人間業とは思はれずと感じてゐるひしてさて
此とうどふに付く又四五日しらちそうして其より
吉二が志もふかくもらせけれど大炊へ一しきまのくれいを
のべられ皆々別をおしみ今暫とどまりけれど大方首
尾よくめでたしとて奥州へとぞいそがれける好子平家
ついにはその大将とおごる平家を打亡し源氏一統の世と
なるべし此牛若のいさほと智勇の程を寿けり

一陽齋筆

年若
大賊を
誅し
て
國民
救やすん
壽

板元 江戸馬喰町二丁目 西村屋與八